様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　２ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０１５４６

研究課題名（和文）地域スポーツクラブの教材化ー体罰の克服に向けたスポーツ教育学的アプローチー

研究課題名（英文）Making teaching materials from experience at community sports clubs: A sports educational approach to overcome corporal punishment

研究代表者
神谷　拓（KAMIYA, Taku）

関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：７０４６０４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、体育授業や教科外体育の場面において、子どもたちに地域スポーツクラブで生じている課題に取り組ませる事で、教師による暴力を用いた指導を克服することであった。本研究を通して、地域スポーツクラブで生じる課題をワークシートで可視化する原理や、それらを子どもたちに解決させていく方法（「神谷メソッド」）が明らかになった。そして、このメソッドを用いることで、子どもに地域スポーツクラブの自治を体験させることができるとともに、体罰を用いた指導も抑止していくことが可能になると考えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、１，暴力を用いたスポーツ指導の実態を批判するだけでなく、それに変わる具体的な指導方法（神谷メソッド）を示したこと、２．学校におけるスポーツ活動と地域スポーツ活動を「自治」という考え方で関連づける見通しを示したこと、３．子どもの主体的な活動を導くために、課題を可視化するというアプローチを示したことの3点である。これらの研究成果を踏まえた実践によって、暴力を用いた指導を改善していく見通しが開ける。この点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to discourage the use of corporal punishment by teachers of Physical Education and extracurricular activities by having children work on the issues arising in community sports clubs. This study revealed the principle of visualizing issues arising in community sports clubs by using worksheets and the method of having children solve these issues, i.e. the Kamiya Method. We believe that by using this method, it will become possible to have children experience the autonomy of community sports clubs and also to discourage teachers from using corporal punishment to discipline students.

研究分野：体育科教育学、スポーツ教育学

キーワード：運動部活動　地域スポーツクラブ　教育課程　教科以外活動　スポーツ教育学　体罰　暴力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、2015 年度（平成 27 年度）から開始した。開始当初の背景には、2012 年 12 月に、大阪市の運動部員（高校生）が顧問による体罰を背景に自殺をし、他の地域においても同様の事例が繰り返されていたことがあった。これを受けて、体育・スポーツ団体、学校関係団体、そして学会及び大学が体罰根絶の方針を示していた。例えば、日本体育学会内には体罰・暴力根絶特別委員会が発足され、2015 年 3 月に報告書がまとめられていた。また、日本体育科教育学会第 18 回大会や日本体育学会第 64 回大会（体育経営管理領域）では、体罰や運動部活動のシンポジウムが開催されてきた。

筆者は、これらの学会のシンポジストとして、体育科教育学・スポーツ教育学の立場から、教師の専門性が発揮される運動部活動指導の在り方と、その教育内容を提案してきた。この他にも、『運動部活動の教育学入門』（大修館）において、戦前から道徳教育や精神教育を理由にした体罰が見られることや、1980 年代にも同様の事件が発生していること等を指摘してきた（神谷, 2015）。さらに、図１のような地域スポーツクラブで求められる「自治内容」の試案を示した。これは、みんなで運営に参加しながら強くなっていく運動部活動を目ざすことで、体罰の背景にある指導者への過度な依存や、それを隠蔽するような閉鎖性から脱却する提案であった。今回、取り組んだ研究は、その延長に位置づくものであり、体育科教育学やスポーツ教育学の知見を活かして、学校体育全体をフィールドにした「自治内容」（図１）が経験できる教材を考案し、体罰の問題を教育内容と指導方法の両面から解決していくものである。

①〈試合・練習〉……みんなで上手くなり、みんなが合理的にプレイできる
- ルール・戦術会議（学習）
- 目標・方針・練習計画の決定
- 対戦チーム・メンバーの選定
- 出場大会の選定
- プレイの撮影・分析
- 選手・ポジションの決定

②〈組織・集団〉……みんなで参加して運営する
- クラブ・チームの名称を決める
- クラブ・チームに必要な人を集める（指導者などの専門的な人材を選ぶ）
- 役割分担（代表者・キャプテン、監督、大会申し込み係、審判係、用具係［買い出し、疑似雪玉・旗の制作］、渉外係［外部との交渉］、交通係、ルール・作戦検討係、日程調整係、ビデオ撮影係等）

③〈場・環境〉……みんなで平等に場・環境を整備・管理・共有する
- 練習・試合・ミーティングの日程、時間・場所の決定・確保
- 経費の計上・管理・捻出
- 用具の準備・管理・購入
- 交通手段等の検討（試合・練習）
- 場・環境のシェア・共有（1つの施設を複数で使う場合において、どのようにすればシェア・共有できるのか。施設の空いている時間帯を調べる等）

図１　雪合戦クラブの立ち上げから大会参加までに必要とされた「自治内容」

２．研究の目的

本研究の目的は、学校体育（体育授業、教育課程内のクラブ、体育行事、運動部活動）の各場面において、地域スポーツクラブで求められる「自治内容」が経験できる教材を考案し、教育内容と指導方法の両面から、体罰克服のアプローチを示すことであった。そのために、地域スポーツクラブにおける「自治内容」（自分たちで解決に取り組む課題）を、日本体育協会（日本スポーツ協会）と新日本体育連盟（新日本スポーツ連盟）が刊行する雑誌から分析することにした。そして、それらの分析によって得られた「自治内容」を、学校体育の各場面で経験できる教材に加工し、実践研究を行うというデザインを描いた。そして最終的には、考案した教材を配列したカリキュラムを示し、体罰問題を克服していく見通しを示そうと考えた。

２．研究の方法

当初の研究計画は、以下の通りである。

（１）　平成 27 年度から 28 年度においては、地域スポーツクラブの理論と実践の両面から、今日までにどのような「自治内容」が示されてきたのかを分析する。
（２）　平成 29 年度から 30 年度にかけて実践研究に入る。とりわけ、これまで学校体育で指導されてこなかった「自治内容」に注目し、それらを組み込んだ教材を考案し、教育現場で実践をする。
（３）　最終年度である令和元年度には、考案された教材を配列したカリキュラムを提案し、体罰克服に向けたスポーツ教育学的アプローチを体系的に示す。

概ね、当初の計画通りに研究を進めることができたが、（３）のカリキュラムの提案に関しては取り組むことができなかった。理由は、（２）の実践研究のフィールドを、授業と運動部活動に焦点化したこともあり、フィールドが学校体育の様々な領域には広がらなかったためである。このような予定の変更に伴い、カリキュラムを示すよりも、授業や運動部部活動における実践の内容や方法を具体的に示すことが先決であると考えた。これは、当初からの予定変更であったが、実践を焦点化したことによって「神谷メソッド」という方法を提唱することができた。

４．研究成果

本研究の成果は、以下の 3 点である。

（１）　部活動の自治内容の明確化

新日本体育連盟（新日本スポーツ連盟）、日本体育協会（日本スポーツ協会）の雑誌の分析を

通して、地域スポーツクラブで生じる課題を整理した。さらに、それを運動部活動で生じる課題に言い直し、M県の中学校、高等学校の運動部活動を対象にして、質問紙調査に取り組んだ。その結果、現状の運動部活動において、生徒自身が課題の解決に関わる機会が少ないことが明らかになった（図２～４）。

NO	課題(質問項目)	校種	1(大人が解決した)	2(生徒が解決した)	3(大人と生徒で解決した)
1	大会や試合のルールを調べる	中学校	58%	4%	29%
		高校	42%	7%	33%
		計	50%	6%	31%
2	試合中に使う戦術・作戦・プラン	中学校	38%	3%	55%
		高校	29%	10%	55%
		計	34%	6%	55%
3	部の目標や方針	中学校	14%	19%	63%
		高校	18%	19%	58%
		計	16%	19%	60%
4	練習の内容	中学校	32%	4%	60%
		高校	27%	13%	56%
		計	29%	8%	58%
5	練習試合の相手	中学校	84%	0%	7%
		高校	71%	1%	16%
		計	78%	1%	11%
6	出場する大会	中学校	82%	0%	14%
		高校	71%	1%	20%
		計	77%	1%	17%
7	技術・戦術の課題を明らかにする	中学校	36%	2%	52%
		高校	26%	9%	55%
		計	31%	6%	53%
8	大会に出場するメンバー	中学校	69%	1%	27%
		高校	48%	5%	42%
		計	58%	3%	34%
9	大会・試合のポジション	中学校	59%	2%	34%
		高校	41%	7%	44%
		計	50%	5%	39%

図２　教育現場における「自治内容」の取り組み状況（練習・試合）

NO	課題(質問項目)	校種	1(大人が解決した)	2(生徒が解決した)	3(大人と生徒で解決した)
10	学校名以外にクラブ・チーム名を付ける	中学校	12%	1%	2%
		高校	7%	2%	3%
		計	10%	1%	3%
11	学校外から部活に必要な人を探し、依頼する	中学校	44%	0%	3%
		高校	42%	1%	6%
		計	43%	1%	4%
12	キャプテンの決定	中学校	13%	14%	59%
		高校	17%	33%	45%
		計	15%	24%	52%
13	キャプテン以外の役割の決定	中学校	21%	16%	55%
		高校	13%	35%	42%
		計	17%	26%	49%
14	組織運営に関わる約束事	中学校	33%	5%	55%
		高校	25%	9%	56%
		計	29%	7%	56%
15	メンバーの募集	中学校	11%	32%	35%
		高校	9%	38%	39%
		計	10%	35%	37%

図３　教育現場における「自治内容」の取り組み状況（組織・集団）

（２）　クラブインテリジェンスワークシートと神谷メソッド

（１）でふれた部活の実態をふまえて、「自治内容」を可視化して生徒に取り組ませる、指導の原理を考案した（神谷，2016）。その後、山梨英和中学校・高等学校で実践研究に取り組み（神谷，2017）、運動部活動で生じる課題を 21 項目に整理した、クラブ・インテリジェンス・ワークシート（CIW）を用いて、現状の自治集団活動の実態を可視化するとともに、生徒主体の部活動を推進していく方法（「神谷メソッド」）を提唱した（神谷，2018）。生徒は、このワークシートを用いて、部活動の方針や競技目標を確認するとともに、21 項目の課題に「今は」誰が取り組んでいるのか、そして、「これから」は誰が取り組むのかを記入し、今後の運営に活かしていくことになる。なお、宮城県塩竈市教育委員会は、この方法を用いた実践を市内の複数の中学校でおこなった。生徒、顧問、部活動指導員・外部指導者、保護者が一堂に集まってワークシートを記入することで、それぞれの役割分担を確認することができるなど、一定の成果を見ることができた（塩竈市教育員会，2018，2019）。

NO	課題(質問項目)	校種	1(大人が解決した)	2(生徒が解決した)	3(大人と生徒で解決した)
16	練習・ミーティングの日程	中学校	71%	1%	25%
		高校	44%	5%	46%
		計	57%	3%	35%
17	練習・ミーティングの時間	中学校	72%	1%	23%
		高校	41%	6%	46%
		計	57%	3%	35%
18	練習・ミーティングの場所	中学校	76%	1%	19%
		高校	47%	6%	39%
		計	62%	4%	29%
19	練習試合の日程・時間・場所	中学校	85%	0%	7%
		高校	69%	0%	20%
		計	77%	0%	14%
20	部活動に必要な予算の計上・支払	中学校	84%	1%	12%
		高校	74%	1%	19%
		計	79%	1%	15%
21	用具の準備や管理	中学校	9%	24%	63%
		高校	8%	31%	56%
		計	9%	28%	59%
22	連絡手段の決定・整理	中学校	73%	2%	19%
		高校	25%	19%	46%
		計	49%	11%	33%
23	学外で活動をする時の移動手段や方法	中学校	66%	5%	25%
		高校	32%	12%	50%
		計	49%	9%	38%
24	学校内・外の施設利用の手続き	中学校	86%	0%	4%
		高校	71%	2%	17%
		計	78%	1%	11%

図４　教育現場における「自治内容」の取り組み状況（場・環境）

（３）文献とホームページによる実践の推進

（２）の実践研究の成果を、中学生や高校生に還元するために『僕たちの部活動改革―生徒自治 10 のステップ』（かもがわ出版）を刊行した（神谷，2020）。同時に、関西大学神谷拓研究室のホームページを開設し、先の CIW を始めとする、部活動の自治集団活動を推進するワークシートをダウンロードできるようにした。これらの取り組みを通して、体罰克服に向けたスポーツ教育学的アプローチの啓蒙につとめた。

（引用文献及び URL）

・　神谷拓（2015）運動部活動の教育学入門―歴史とのダイアローグ―．大修館書店.
・　神谷拓（2016）生徒が自分たちで強くなる部活動指導―体罰・暴力に頼らない新しい部活づくり―．明治図書.

・ 神谷拓（2017）対話でつくる教科外の体育．学事出版.
・ 神谷拓（2018）部活動の自治と学びを可視化する―クラブと部活動をつなぐ―．日本部活動学会第 1 回研究集会（基調報告）.
・ 神谷拓（2020）僕たちの部活動改革―生徒自治 10 のステップ―．かもがわ出版.
・ 関西大学・神谷拓研究室のホームページ。https://wps.itc.kansai-u.ac.jp/kamiya/
・ 塩竈市教育委員会（2018）平成 29 年度宮城県教育委員会　学校現場における業務改善加速事業　部活動の在り方及び部活動の指導体制づくりに関する実践研究　実践研究報告書.
・ 塩竈市教育委員会（2019）平成 30 年度宮城県教育委員会　学校現場における業務改善加速事業　部活動の在り方及び部活動の指導体制づくりに関する実践研究　実践研究報告書.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 神谷拓	４．巻 1
２．論文標題 部活動の存在理由ー学校、子ども、教員の観点からー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本部活動学会研究紀要	６．最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神谷拓	４．巻 48
２．論文標題 運動部活動の問題と法、制度、権利	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本教育法学会年報	６．最初と最後の頁 136-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堀江なつ子・神谷拓	４．巻 856
２．論文標題 運動部活動の自治　はじめの一歩	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育	６．最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神谷拓	４．巻 30(7)
２．論文標題 運動部活動で子どもの「やる気」を引き出すには？ー「自治」と「内発的動機づけ」との関係ー	５．発行年 2016年
３．雑誌名 コーチングクリニック	６．最初と最後の頁 56-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 嶋津寿克・神谷拓	4．巻 33(1)
2．論文標題 体育の主体的な学習活動を引き出す指導方法の考察ー行事単元実践に注目してー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 体育科教育学研究	6．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 神谷拓
2．発表標題 運動部活動における暴力・暴言の構造
3．学会等名 日本部活動学会第2回研究集会
4．発表年 2019年

1．発表者名 神谷拓
2．発表標題 運動部活動の地域移行に関わる歴史と課題
3．学会等名 日本体育学会第69回大会・本部企画シンポジウム
4．発表年 2018年

1．発表者名 神谷拓
2．発表標題 運動部活動の問題と法、制度、権利
3．学会等名 日本教育法学会第48回定期総会・公開シンポジウム
4．発表年 2018年

１．発表者名 神谷拓
２．発表標題 部活動の自治と学びを可視化するークラブと部活動をつなぐー
３．学会等名 日本部活動学会第1回研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 神谷拓
２．発表標題 部活動の存在理由ー学校、子ども、教師の観点からー
３．学会等名 日本部活動学会第1回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 神谷拓、田沼郎、柳優香、山下正寿、世取山洋介、喜多明人、中嶋哲彦、堀尾輝久、安倍大輔、田中良、大谷良子、鹿野晶子、内海裕美、神川晃、佐藤和夫、松本俊彦、増山均、諸見里咲、山田恵子、吉岡亜希子ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 かもがわ出版	５．総ページ数 216
３．書名 子ども白書2019	

１．著者名 佐藤善人、神谷拓、鈴木秀人、山本理人、杉山佳生、朝倉雅史、鈴木宏哉、中澤篤史、森村和浩、青野博、内田雄三、松田雅彦、松田恵示、村田一恵、齊藤まゆみ、内藤久士、浦久保和哉、菅文彦、中小路徹、森丘保典	４．発行年 2019年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 184
３．書名 スポーツと君たち―10代のためのスポーツ教養	

１．著者名 神谷拓	４．発行年 2020年
２．出版社 かもがわ出版	５．総ページ数 210
３．書名 僕たちの部活動改革ー生徒自治10のステップー	

１．著者名 佐藤 善人、神谷拓ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 198
３．書名 子どもがやる気になる!!スポーツ指導	

１．著者名 神谷 拓	４．発行年 2017年
２．出版社 学事	５．総ページ数 175
３．書名 対話でつくる教科外の体育	

１．著者名 学校体育研究同志会編	４．発行年 2018年
２．出版社 創文企画	５．総ページ数 211
３．書名 スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり（「授業、特別活動、課外活動の関連性」80-83頁を執筆）	

１．著者名 神谷拓	４．発行年 2016年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 127ページ
３．書名 生徒が自分たちで強くなる部活動指導　「体罰」「強制」に頼らない新しい部活づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考